

ペットボトル

ほら、ひたいにあてると　まだ  
すぐくつめたい

片腕でからだをもちあげて

おきあがった

背のたかい少年、ふみこむこちらを　うかがう

まなざし

それならぼくもわかる

ペットボトルにすっと目がいって

ふきだす汗に目をつむる

その一瞬

ぼくらのなかのみずがゆれる

コロラドのモーターの

あの青いプール

排水溝へとつづく砂のながれも

みずをほしがってた

アスファルトに手をついて

にじんだ赤い血

それとおなじ赤い血によごれて　まったく

べつのひとからうまれる

からだ

全身のみずをほしがるそのからだ

だれよりも腰をおとし

親指の骨で

スケートボードをふみあげる  
その一瞬、はるかな  
道路がみえる

ふいにぼくは  
ここにいないやつのことを  
ここにいないからこそ書かなくてはとおもう  
さっきまで

肩をぶつけあってたやつらを  
背のたかい少年は  
ひかりのぐあいで見うしなって  
つばをのむ

広大な駐車をすべりきり  
それでも まだ、ひとりなら  
たぶん

股間をたしかめる  
その一瞬の ふかい青空

ぼくはなにもいうことがない  
ひろがりに  
ひとはきえていくのに  
ひろがるそれをまえにすると  
なぜことばがうしなわれてしまうのか  
砂ほこりをしずめるのではない  
ただ、むねをひく  
雨のおいがした

肩をうつ  
一滴、二滴のことば  
それではまったくないたりぬものを  
よけるまもなく、うまれてからこれまで

どしゃぶりにこぼされてしまって  
それが、ずっと

過去のほうから

キングストリートをけとぼしながら

この一帯を黒くぬらしていく

少年を、少年の母を、さきにかえったやつらを

ぼくのからだを はげしく

ぬらしていく

おもたくへばりつくズボン

なにかがとどく

ちいさな封筒のマーク 木下くん

そんなきがしてかるくふれる

と、おおきな波の写真

パタゴニアのダイレクトメールだった

ぼかみたいな青空

急になまいきに見えた 少年の目

おもいだす

ものごころがつくまえの

雨粒をかぞえることをやめないところ

ことばの

雨はすがすがしい

そんなところを、かるくふるって

のみほしたら

ゆっくりほてりが ひいていく

そしてまた、すごい汗だ